

令和 6年 10月 19日(土)

## 0歳児 『 触りたい 』

### 【エピソード】

私はS児を抱っこして職員室に行った。入ってすぐにS児は、何かを発見したように「ん！」と声を出しながら指を差した。指差す方向には、ゲージの中にある2匹の生後2カ月のウサギがいた。抱っこからゆっくり降ろすと、躊躇することなくはいはいでウサギの元へ一直線に向かった。動くウサギを見て、早く触りたい！とワクワクした気持ちで目を輝かせながら、私の顔を見上げた。

他の職員がS児に気づき、「ウサギさんおるね～、怖くないの？」と声をかけ、ゲージをそっと開けてくれた。私もすぐにS児の元へ行き、近くで様子を見守ることにした。ゲージが開くとすぐにS児は怖がる様子もなく、人差し指でツンツンとウサギを触り始めた。まだ力の加減や触り方が分からず、目を触ろうとしたり勢いよく触ってみたりしていた。

S児がウサギに勢いよく触れた瞬間、ウサギがビクッと体を動かしたり逃げたりした。思いがけない反応にS児は思わず手を引っ込めた。すぐに私の方へ顔を向け、触りたい気持ちとびっくりした気持ちが混ざり合った様子で、私の手を引っ張りウサギのすぐ側に持っていった。私は、S児の表情や様子に目をやりながら「こうやって優しくよしよしするんだよ。おめめは痛い痛いだからね」などと分かりやすい言葉でS児に伝えた。S児は私がウサギを触っているところを真剣にじーっと見つめ、目を離すことはなかった。その後再び自分でウサギに触ろうと試みた。その触り方は初め触った時に比べて、手を差し伸べるスピードはさっきよりもゆっくりであった。それでもまだ、優しく触れることは難しく、ウサギが驚いたり逃げたりしてしまったため、S児の手を持ち一緒に撫でたことで、S児はウサギに触れても逃げない嬉しさから笑みがこぼれた。ウサギが気持ち良さそうにしているのを見て、私はS児の目を見ながら「優しくよしよしできたね」と声をかけた。



### 【考察】

#### ○自己肯定感を育む視点

S児は昨年度2月に入園をした。今年度、0歳児(桜組)は4、5月時点で2人しか在園していなかったため、保育者が一对一の関わりを大切にしたことにより、現在も安心感をもって過ごすことができている。これまでにカブトムシやイモリ、メダカや鈴虫など様々な生き物に出会い、見たり触ったりしてきたことでS児は生き物に対してとても興味をもっている。私は生き物や自然と関わる中で、S児はまだ小さいから、危ないからといって触らせないということはせず、S児が見たものや感じたことを言葉にししながら、様々な生き物や自然に触れ合う機会を大切にしてきた。

ウサギに興味を示し、ゲージの前まで行き、ワクワクした気持ちで保育者の顔を見上げる姿は、触ってみたいという気持ちの表れと捉えている。今まで話すことができないS児の気持ちを代弁しながら関わってきたこ

とにより、S児の他者に自分の思いを伝えたい、表したいという気持ちに繋がっていると考える。また、ウサギの思いがけない行動に驚きながらも、もう一度触ろうと保育者の手を引っ張る姿は、4月からの信頼関係を踏まえて、先生なら欲求を満たしてくれると思い、とった行動であると捉えた。保育者の手を引っ張る姿は、初めて見せた姿であり、自分なりに何かをして欲しい時の方法を見つけている。安心する保育者と一緒にウサギに触れた経験が生き物を大切にすることを育んだと同時に、S児の思いに寄り添ったことが、S児の自己肯定感の高まりに繋がるのではないかと考える。このような経験や関わりを通して自分が大切にされていることを実感させたいと考えている。

#### ○温かな感情の芽生え

S児がウサギを見つけてはいはいで駆け寄り手を伸ばす姿は、見たい、触りたいという好奇心があったからである。これは身近な生き物に対する関心を抱き、大切に扱おうとする気持ちの基盤になるものだと考える。

勢いよく触ると、ウサギが驚いて逃げ、S児は手を引っ込めている。触りたい自分と驚くウサギ、自分とは違う意思をもつ存在であると感じた瞬間であった。まだどのように扱って良いか分からず、勢いよく触るS児に対して注意をするのではなく、実際に触れるところを見せたり簡単な言葉で伝えたりすることを大切にしていた。ウサギを想って優しく触れることは難しいことではあるが、保育者と一緒に撫でることで温かな感情がS児の中で芽生えていたことが表情や仕草から読み取ることができた。もちろんその場で見て終わりにすることもできたが、生きている物への関わり方を知らせることで、生き物に対する接し方や命を大切にしようとする心が育つと考えている。

#### ○思いやりの気持ち

最近のS児は友達に興味を示し、頭を撫でる姿が見られている。友達に対するスキンシップから頭を叩いてしまうことがあるが、S児の思いを受け止めながらも「よしよしするんだよ」とその都度言葉や仕草で伝えている。今までは保育者対自分とのやり取りであったが、少しずつ身近な人や物に興味をもち自ら関わろうとする姿は、相手のことを考えようとする土台の一つである。友達との関わりの中で保育者が仲立ちをしていくことで他者への信頼や思いやりに繋がることを期待している。

ウサギに対しての関わり方が分からないS児が、保育者からの「よしよしするんだよ」という言葉がけにより、慎重に触ろうとする姿が見られた。これは、保育者からの言葉を理解し、ゆっくり触ろうとする姿から、S児に保育者の気持ちが伝わっていることが分かる。また、「優しくよしよしできたね」と声をかけられ、自分の思いや行動を受け止められることは、自分の気持ちを素直に表現することに繋がる。このような経験を積み重ねることは、小動物や人に対して思いやりの気持ちをもつ土台になっていくと考える。

また、ウサギに触ってみると思いがけない反応に戸惑いを感じていたS児だが、保育者が声をかけながら優しく触れる所を見せたことで、もう一度自分で触ってみたいという気持ちになっている。これは自分とは違う存在を知るきっかけとなった場面であり、さっきより優しく触ろうとする姿が見えたことは、思いやりの気持ちが芽生えている瞬間であった。